

73
会報

響き日

発行所 公益財団法人 聴覚障害者教育福祉協会
〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-43-11 福祉財団ビル5F
TEL 03・6907・2537
FAX 03・6907・2915
発行人 山東 昭子 編集人 櫻井 博
(題字 山東昭子会長)

第四十回 聴覚障害児を育てた

お母さんをたたえる会

平成二十九年十二月十八日(月)憲政記念館において第四十回聴覚障害児を育てたお母さんをたたえる会を開催いたしました。今回は全国都道府県より推薦された六十一名のお母さん・お父さんが表彰されました。ご家族と共に来場して表彰を受けられたお母さん方は二十五名でした。

十一年連続してご臨席いただいた秋篠宮妃殿下から、開会式の中で言葉を賜りました。また、式典後には、秋篠宮妃殿下と被表彰者、そのご家族とでご懇談される場面もあり、和やかな雰囲気の中で行事が行われました。

幸い天候にも恵まれ、式典の部・発表の部ともに予定通り滞りなく実施することができました。例年通り多くのボランティアの皆さんに支えられ、温かい労いの気持ちに包まれた行事として開催できました。有難うございました。



第40回

聴覚障害児を育てたお母さんをたたえる会

平成29年12月18日(月)

開会式

秋篠宮妃殿下のお言葉

第四十回聴覚障害児を育てたお母さんをたたえる会の開催にあたり、全国からお集まりの皆さまにお会いできましたことを、大変うれしく思います。

本日は、最初に、聴覚障害児を育てたお母さま方への表彰がございます。この表彰は、昭和五十三年に始まり、今日までに八千五百名以上の方々が受賞されました。

聴覚に障害をもつ子どもたちが、コミュニケーションの能力と、社会で生きていく力を身につけるまでには、幾つもの難しい課題があると伺っております。皆さまは、お子さまが言葉を学び、興味や関心を広げ、学校などの集団生活での多様な経験を通して、社会の中で自分らしく生きていくために、はかり知れない努力や工夫を重ねてこられたと思います。また、不安や難問に直面されたこともあったでしょう。そのような中で、周囲の支えや、新たなうれしい発見、出会いなどに勇気づけられながら、希望を持って、お子さまを立派に育てられましたことに、心から敬意を表します。



お言葉を述べられる

秋篠宮妃殿下

祝
辞

文部科学副大臣 丹羽 秀樹



本日ここに、秋篠宮妃殿下の御臨席を仰ぎ、「第四十回聴覚障害児を育てたお母さんをたたえる会」が開催されますことを心からお慶び申し上げます。はじめに、本日受賞されますお母様方に対し、心からお祝い申し上げます。また、お母様方がこれまでに様々な場面で直面されてきたであろう並々ならぬ御苦労と、お子様に対する深い愛情と御献身に對しまして、心から敬意を表します。また、四十年もの長きにわたり、この意義深い表彰事業を実施されておられます公益財団法人聴覚障害者教育福祉協会に對しまして、感謝申し上げます。

さて、文部科学省では、子供たち一人一人の自立と社会参加を見据えて、その時点で教育的ニーズに最も確に応える指導や支援を行うことができるよう、教職員の専門性の向上、教育環境の整備、障害

続いて、社会貢献の著しい聴覚障害者への表彰がございます。今回の受賞者は、青年海外協力隊員としてドミニカ共和国のろう学校で教鞭を執るなど、途上国の障害者支援に貢献されました。国際的な活躍をされていることを心強く思います。

そして、「第十三回全国聾学校作文コンクール」の金賞受賞者の表彰がございます。今年も小学生、中学生、高校生が、考えていることや経験したことなどを、自分の言葉で書き表してくれました。この度、受賞される方々を始め、作品を寄せてくださった小学生、中学生、高校生一人一人が、今後ますますことばの力を伸ばしていくことを期待しております。これから表彰を受ける皆さまに、心からお祝いを申し上げます。

むしろ、聴覚障害に関わる分野でご尽力された方々に感謝の意を表しますと共に、聴覚障害に対する理解がさらに深まり、皆が安心して豊かに暮らせる社会が築かれますことを願い、大会に寄せる言葉といたします。

のある子供に対する様々な合理的配慮の一層の充実等に精力的に取り組んでいるところです。一方、障害のある子供が、学齢期に充実した特別支援教育を受けるのみならず、生涯を通じて、自らの可能性を追求できる環境を整え、地域の一人として豊かな人生を送ることができるようするため、障害のある方々それぞれのライフステージにおける多様な学習活動を支援する取組を推進することとしております。御参会の皆様方におかれましては、こうした教育分野における取組について、今後とも格別の御理解と御支援を賜りますようお願いいたします。

結びに、公益財団法人聴覚障害者教育福祉協会の一層の御発展と、本日御参会の皆様方のますますの御健勝と御活躍を祈念し、お祝いの言葉といたします。

祝 辞

厚生労働副大臣 高木 美智代



本日、ここに秋篠宮妃殿下の御臨席を仰ぎ、公益財団法人聴覚障害者教育福祉協会の「第四十回聴覚障害児を育てたお母さんをたたえる会」が開催されるに当たり、一言お祝いを申し上げます。

はじめに、本日表彰を受けられる方々に対し、心からお祝い申し上げます。また、聴覚障害のあるお子さんを日々支えてこられたお母様やご家族の皆様は、心から敬意を表します。

特に、お母様方におかれては、お子さんの障害児支援サービスの利用や学校卒業後の進路選択など、お子さんの成長を支えるにあたり、喜びだけでなく、大変な御苦労もあったと思います。

この「たたえる会」を通じて、これからも、お母様方が、お子さんの成長に寄り添っていかれることを応援するとともに、聴覚障害のある方々の教育や福祉について、幅広く国民の理解が深まっていくことを期待しています。

厚生労働省では、近年、様々な制度改正を行い、障害のある方々の支援の充実に取り組んでいます。

昨年五月には、障害者総合支援法等が改正されました。改正法では、障害のある方の地域生活に関する支援を充実するほか、障害のある子どもたちの多様な支援ニーズに対応することなどが盛り込まれております。平成三十年四月の施行に向けて万全を期してまいります。

また、聴覚障害のある方への支援としては、障害者総合支援法の意思疎通支援事業等により、手話通訳者や要約筆記者といった、意思疎通をサポートする人材の派遣や養成などに取り組んでおります。

今後とも、関係する皆様の御意見を十分にお伺いしながら、聴覚障害のある方々への情報支援やコミュニケーション支援等の充実に取り組んでいきたいと考えています。引き続き、御理解と御協力をいただきますよう、よろしくお願いいたします。

結びに、この度表彰を受けられました皆様の今後の一層の御活躍と、山東昭子会長をはじめとする聴覚障害者教育福祉協会の皆様の益々の御発展を祈念し、お祝いの言葉といたします。

〇〇 お母さんの体験発表 〇〇

群馬県 飯島 恵子

こんにちは、群馬県高崎市から参りました飯島恵子と申します。

私の家族は、主人（夫）と長男・康（やすし）との三人家族です。隣町には、妹夫婦や、一人暮らしの母が住んでいます。

康は二十八年、双子の長男として、六百二十五グラムで生まれました。

お母さんの体験発表



妊娠二十四週の早産でした。

生まれてすぐ康の鼻にはチューブが挿入され、チューブを通して二時間おきに1ccのミルクを飲ませました。

私たち夫婦は、康が一生懸命ミルクを飲む姿、生き

ようとする姿を、毎日祈るような気持ちで見ました。生きていてくれるだけで幸せ。「がんばれ！」と祈り続けました。双子の次男は、生まれて四日後に亡くなりました。康の名前には、健康に育ってほしいという願いを込めています。康が退院できたのは二年二ヵ月後でした。生まれてから毎日少しずつ成長し、二千五百グラムになっていました。

実は、康が群馬県立小児医療センター（病院）に入院していた時、紀子様が近くの利根川でのサケの放流と、その病院を見学するために来られていました。そのとき、初めて紀子様にお会いいたしました。康は入院中、医師から「耳の反応がありません」と言われていました。退院後さっそく児童相談所に出向き、ろう学校の教育相談を受け、その後、幼稚園に入園しました。康は、他の子に比べ、発達も知能もはるかに遅れているように感じましたが、小さく生まれたのだから仕方がないと思っていました。すると、小学校に上がる段階になって、先生から「養護学校を見学してはどうですか？」と言われ、びっくりしました。みんなと仲良くなる学校に入学できると思っていました。この時初めて知的障害という言葉を知りました。

そして、小学校は養護学校に進みました。往復はスクールバスでした。毎日、スクールバスに乗り、たくさんの方たちや先生に関わることができました。康はそれがとても嬉しかったらしく、小学部、中学部の九年間は一度も休まずに通いました。まさにスクールバス効果でした。康は肺の機能が未熟でしたが、学校で毎日、朝のラジオ体操やマラソンに取り組んだので、体力がぐんと付いて、細い体にはだんだんとお肉も付くようになりました。

PTAの保護者の方には、明るく、ポジティブシンキングで、素晴らしい方ばかりでした。「難しいことは考えないようにしましょう」と先輩方から教えられ、「なんて大らかなんでしょう」と感じました。そのうち私もこういう前向きな性格になりました。周りのお母様方のおかげだと思っています。

養護学校では、先生方から「ろうのお子さんは初めてなので、いろいろ教えてくださいね」と言われました。コミュニケーションの際は、「絵カード」

を使用したり、それを校内に貼ってもらったりしました。先生は、簡単な手話も採り入れてくれました。

康が小学部五年の時に「ぐんま少年の船」という四泊五日の活動に参加しました。小学五年から高校三年までの青少年約五百人が大型客船のつぽん丸に乗って、北海道まで行くのです。船内でゲームをしたり、上陸したところでの活動に参加したりして、ひと回り成長して帰ってきた康がいました。私はその頃、ろう重複の子どもを持つお母さん方と知り合いになりました。何度か集まって話をするうちに、県内で、ろう重複の子どもを持つ親の会を作りたいという気持ち芽生えました。そこで、「トマトの会」と名付け、少しずつ活動を始めました。親子で一緒にキャンプに行ったり、クリスマス会などのイベントを開いたりしました。「トマトの会」の名前の由来は、いつも集まっていたお店の看板がトマトの絵だったからです。それに「赤って元気になる色だよ」という簡単な理由もあります。すでに結成約二十年を迎えました。

康の話に戻ります。中学三年になり、進路を考える時に、群馬大学教育学部の金澤教授と出会いました。金澤教授は障害児教育の専門家です。「手話も必要だよ」とアドバイスを受け、ろう学校の高等部に入學しました。

ろう学校へは、3年間、私の車で往復しました。毎日連れて行くので、学校の様子が分かります。

康はどんな手話を覚え、楽しく通っていました。幼稚部の頃は、我が子と他の子を比べてばかりいましたが、今は、過去や昨日と比べて、成長を喜ぼうと考えるようになりました。そして、私は「褒める達人」を目指すことにしました。

褒める相手は康だけではありません。例えば、主人(夫)がお皿を洗ってくれるとうんと褒め、ゴミ出しをしてくれるとうんと褒め、といった具合です。そのおかげで、主人(夫)は料理もできるようになりまし。もちろん康に対しては、どんな小さなことでも褒めます。褒めた成果なのか、最近では洗濯物を干してくれるようになりました。もちろん後でそっと干し直しますが・・・
現在では作業所に通い、梅干しや野菜を作り、元気に通っています。

最後に、子どもがこうして元気でいてくれるのも周りの皆さんのおかげです。主人はもちろんのこと、親せき、養護学校の先生、ろう学校の先生、私の友人たち・・・康がいてくれるからこそ、多くの人間関係に恵まれ、いろいろな体験や経験ができました。「ろう重複」という障害の重複は、「重なる福」だと考えています。ダブルで幸せなんだ、と。振り返って、改めて実感しております。

今、皆様とこうしてお会いすることができたご縁にも感謝いたします。

家に帰れば、自分の母と義理の母、義理の弟の3人の介護に追われ、慌ただしい日々ですが、楽しくやっています。

本日は本当にありがとうございます。

●第四十回 聴覚障害児を育てたお母さんをたたえる会受賞者

【北海道】 後藤晶子、熊地美春、伊藤都子、久川幸子、佐藤一彦、吉村奈美、外川恵美、石原環

【青森】 小川陽子

【秋田】 寺村恵利子

【福島】 小出良子

【茨城】 井川典子

【群馬】 山中恵子、山中清治、飯島恵子、木暮勝美

【埼玉】 門脇寛子

【千葉】 風戸愛子、安田和子、福田美奈、廣澤美由紀

【東京】 田原夏子、小林直美、大塚久美子、高山嘉通

【神奈川】 関根裕子、香川光子

【新潟】 石山聡美、五十嵐尚子

【山梨】 遠藤久美

【石川】 山田雅子、伊藤知代

【富山】 竹腰明美

【長野】 吉澤佐知子、樋口鈴子、徳永陽子、寺澤充江

【静岡】 手塚貴子、池田まゆみ、小出光子、川島陽江

【愛知】 片山吉枝、松本紀恵子、松本洋子

【大阪】 伊藤美里代、織田南江

【兵庫】 宮崎裕美、村澤幸子、津坂めぐみ、脇田洋子

【京都】 栗田紀子、大島智子

【岡山】 吉岡洋子

【広島】 穂森美保子

【高知】 芝るり子、吉田利子、小川友紀、細川康代
【佐賀】 城本さちこ
【宮崎】 清野真紀
【鹿児島】 田中 雅

●全国聾学校作文コンクール審査講評

審査委員長 齋藤佐和

全国聾学校作文コンクールは本年度、第十三回目となり、本日、秋篠宮妃殿下の御臨席を賜り、表彰式ならびに入賞作品の発表が行われますことは、入賞者にとりまして、本コンクールにとりまして、誠に光栄なことであり、深く感謝申し上げます。

本年度は三十九校から百八十二編が集まり、入賞十五編、努力賞九編、佳作十五編が決定しました。本コンクールのテーマは「自然や人とのつながりの中で自分に焦点をあてたもの」です。作品を通して子どもたちの関心の在りかとその変化、また書く力の成長を読み取っていくことができ、審査委員にとっても毎年の喜びになっています。

小学部低学年対象の日記部門は、絵日記でも日記でも応募でき、今年は十二編集まりました。幼稚部でもお母さんと一緒に書いてきた絵日記はことばを育てるため大きな役割を果たしていますが、一人で書くようになってくると、その経験が作文の基礎になっていることが分かります。絵日記・日記は聾学校教育の伝統の一つであり、これからも大切にしたいと思っています。小学部の作文は学校での経験について書いたものが多いのですが、その中で、金賞、聴覚障害教育福祉協会会長賞となった香山侑輝くんの「きらきら」は、四年生になって、集会委員として司会の重責を果たすまでの努力の様子と、きらきら輝いていた上級生のようになりたいという強い思いが印象的で、高学年に進んだという自覚がよく伝わる作品でした。また今回は、五・六年生で、将来の夢についてしっかりと考えた作品も見られました。

中学部では題材は多様化し、体験の中で自分ごとのように感じ、考えてきたかを書く作品が多くなり、小学部からの成長が強く感じられました。金賞となっ

た原島帆南さんの「日本語の美しさに惹かれて」は、美しい日本語を求めて、言葉のレパートリーを拡げようとする努力、また日常的に使う言葉についても大切に考えようとする姿勢などが伝わる優れた作品で、金賞、文部科学大臣賞に輝きました。

高等部では進路、友情、家族、障害などに関わる思いを深く考える作品が多く、表現力や文章の構成力も伸びて、二次審査に進んだ作品はどれも読み応えがありました。金賞、豊学校校長会会長賞を受けた渡会由貴さん「言葉に宿る未来」は、進路をめぐる母親との会話から言葉についての考察を深めており、言葉の力や言葉に込められる家族の愛情を考えさせる作品として高い評価を受けました。

今年に入賞作品の中に、お母さんや家族の深い愛情とそれを受け止めている作者の思いが伝わる作品が多かったことが、二次審査委員会で話題となりました。本コンクールの表彰式・作品発表が「聴覚障害児を育てたお母さんをたたえる会」の中で行われるのも、たいへん意義深いことと改めて感じています。

入選作品集と応募全作品の分析結果をまとめた小冊子は、例年通り全国豊学校に還元していきます。それらを通して、本コンクールがこれからも豊学校の子どもたちの書く力の育成、また日本語の力を育てる聴覚障害教育の専門性の継承に貢献できることを強く願って、審査講評を結びたいと思います。ありがとうございます。

* 作文コンクール金賞受賞者表彰式 *



作文コンクール
金賞受賞者 3 名

全国豊学校作文コンクール文部科学大臣賞受賞作品発表

日本語の美しさに惹かれて

東京都立立川ろう学校

中学部三年 原島 帆南

「心が躍る」「胸が締めつけられる」

この言葉を初めて目にしたとき、不思議だなと思っただ。「嬉しい」とか、「悲しい」という単純な言葉よりも感情の程度がより正確に伝わってくる気がしたからだ。言葉は奥深いと感じた。

小説を読んでいて私はこの言葉に出会った。ある二人が手紙を通して出会うという物語だった。小説を読んでいく中で、知らない言葉があると、意味を調べた。言葉の意味を知ると、一つ一つの言葉が彩られていくように文章が鮮明になった。そして、二人の登場人物が互いに誠意をもって接している様子が手紙の文面からよく伝わってきた。私は、まだ出会っていない二人が、互いのことを想って綴った手紙の美しさに惹かれた。

その時の風景や感じ取ったことなどが印象深く伝わる文章は美しいと思う。美しい日本語を使うことによって、表現力が上がると私は考えている。私は感情を表す美しい日本語をたくさん覚えて使えるようにしていきたいと思うようになった。

中学生になってから、日課帳というものを私は毎日書いている。最初のころはその日の出来事や自分の感情を書くのが苦手で、三行書くのがやっとだった。しかし、自分の知らない言葉を使いたい意識し始めてからは、授業で知った言葉を一日一つ使って書くようになった。毎日続けていくことで、書く量も増え、前よりも言葉のレパートリーが広がったような気がした。

国語の授業で俳句を作ったときは、俳句をいくつか作ってみたけれど、どれも良い句だと思えなかった。俳句を作るのは得意ではない。自分の体験や思いを表現するのに満足できる言葉をあまりもっていないからだ。私の思い描く風景によりふさわしい言葉があるはずだ、と思った私は辞典を手に取った。ふさわしい言葉を見つけない間に時間はかかった。しかし、探していく中で、知らない言葉をたくさん発見することができた。言葉を見つければ、自分らしい表現ができたときは、心が弾んだ。

普段使わない言葉を意識して使おうと心に決めるものの、友達と話しているときは、ついつい便利な言葉を使ってしまうている。

学校で友達と映画の話をしたとき、

「主人公がかわいそうでやばかった。」

「物語がやばいくらい面白かった。」

「感動して泣けちゃった。やばい。」

と、「やばい」という言葉を繰り返して使っていることに私は気づいた。もしかして、

「やばい」という言葉を使いすぎていたのではないだろうか。気になった私は、友達に、

「ねえ、この話で私、『やばい』って何回くらい言っただ？」

と恐る恐る聞いてみた。友達は、頭を傾げながら少し考えて、

「うーん、二十回以上は言っていたよ。」

と答えた。私は衝撃を受けた。そんなに言っていたのか。「やばい」という言葉は冷静でいられないときや感情を強調したいとき、嫌だと思ったときなどに使える便利な言葉として今まで使ってきた。便利な言葉だけれど、このまま使っていたら語彙力が低下してしまうのではないかと不安になった。今振り返ってみると、

「主人公がかわいそうで胸が痛んだよ。」

「物語の展開が読めなくて目が離せないくらい面白かった。」

「泣かない自信があったのに、感動して泣けちゃった。心を揺さぶられる作品だった。」

という言い方もできると思った。

毎日当たり前に使っている日本語だが、まだ知らない言葉が私にはたくさんある。私はこれからも読書を通して知らない言葉を学び、覚えた言葉を積極的に用いていきたい。

● 桜内義雄賞受賞者

母を語る

東京都 廣瀬 芽里

みなさん、こんにちは！

ご紹介いただきました広瀬芽里と申します。

本日はお招き頂きまして有難うございます。
又、この度「桜内義雄賞」と立派な賞を賜り身に
余る光栄と存じます。



身の引き締まる思いで居りま
す。
心より御礼を申し上げます。

私がよちよち歩きを始めた頃、
後ろからいくら名前を呼んでも
振り返らない私を母は「ひよつ
として聴こえないのでは？」と
疑問を抱き始めたようです。

と正式に診断されました。

そして決して治ることのない障害だと宣告された
あの時の衝撃は、生涯忘れられないと振り返って居
ります。

東京から栃木へ嫁いだ母は周囲にサポートしてく
れる人もなく情報も乏しい当時、途方にくれて絶望
的だったそうです。

相談に訪れた母と子の教室の金山先生から栃木ろ
う学校を紹介されました。初めて補聴器をつけて相
談室に入りました。

そして小学部1年生まで栃木ろう学校へ通いまし
た。

自宅から宇都宮のろう学校までは車で約1時間半、
殆ど欠席することなく通い続けました。

通学途中の車窓から「山が綺麗ね」「田植えが始まっ
たね」など私の視線に合わせて母は言葉かけをして
くれました。

帰宅してからはそれらを絵日記にし添えられた文
章をすらすら言えるまでは寝かせて貰えませんでした。
た。

しかし、私は朝から晩までの勉強漬けの日々が嫌
で嫌でたまりませんでした。私は生まれながらのア
ウトドア派、田舎の自然の中で走り回り気分転換し、
心を開放していましたが……。

母があまりにも厳しい為、私は心の中でふと本当
のお母さんはとても優しく別るところにきつと居
る。いつか私を迎えに来るんだと勝手に想像してい
ました。毎晩寝る前に仏壇の前で「早く迎えにきて

ください」と拝んでいました。

小学部に入る頃、妹が生まれました。

妹も高度難聴と判明した時に母は東京への転居を
決意しました。

妹は母と子の教室での指導を希望し、私は普通小
学校へのインテグレーションを叶える為でした。

そして私は小学2年生から大学まで普通校で過ご
すことができました。幸い沢山の友に囲まれ支えて
貰いました。

学校では授業がなかなか理解できず、家庭教師と
一緒に学習の遅れをカバーするという日々でした。

学習は外にも向けてくれて、様々な体験を通して
聞こえないハンデを補うことを心掛けてくれました。

時には友人らも一緒に混じって夏は海、登山、冬
はスキーなどと沢山の経験をさせてくれました。そ
のお陰で沢山の人たちと交流する楽しみを知り、海
外にも目を向けるようになりました。

ダスキンの研修生としてアメリカのギャローデッ
ト大学へ留学をさせて頂き、インターンシップも経
験させて頂きました。

又、途上国を旅していた際、座敷牢状態のろう者と
遭遇することがありました。ショックでした。彼
女を広い世界に開放してあげたいと切に願った。途
上国のろう者を支援したいとその時強く思いました。

そして青年海外協力隊に応募したのです。
幸い希望が叶い2013年から2年半の間、ドミ
ニカ共和国のろう学校にて教鞭を執るという機会を
頂きました。任期終了後もドミニカに残り、ろう学
校の他、職業訓練校にて成人ろう者の指導、育成プ
ログラムなどコンサルタントとしての活動が現在も
続いております。

日本とは異なる文化、言葉の壁など色々障害は
尽きませんが、ドミニカのろう者の支援のため「諦
めない」を胸に微力ながらお手伝いしていきたいと
思っています。

このように私が充実した日々を送れるのは、ひと
えに母のあの日の決断があったからだと思っています。
母は東京で教育をする決断をしてくれました。見聞を広め
る機会を与えてくれました。全身全霊を捧げてくれ
たお陰で妹も私も今があります。その母に伝えられ

るよう、母の口癖「お陰様」「有難う」を胸にろう
者として誇りを持つて歩いていきたいと思つて居り
ます。

最後になりましたが、「聴覚障害児を育てたお母
さんをたたえる会」でお話させて頂く機会を頂きま
したことこの上なく光栄に思つて居ります。

改めて心から感謝申し上げます。
本日は誠に有難うございました。

年度当初の会長ご挨拶

公益財団法人聴覚障害者教育福祉協会会長

参議院議員 山東昭子



会長 山東昭子

新しい年度を迎え、ひ
とことご挨拶申し上げます。

本協会は昭和六年の創
立ですから、八十七年目
を迎えました。今年度も
益々事業の充実を目指し
て努力してまいりますの
で、皆様のご理解とご支
援をよろしく願います。

さて、昨年度の第四十回「聴覚障害児を育てたお
母さんをたたえる会」は、平成二十九年十二月十八
日(月)に実施いたしました。公務が多忙な中を、
十一年続けて秋篠宮妃殿下のご臨席とお言葉を賜り
ました。誠に光栄に思いますとともに、深く感謝い
たすところでございます。

全国の聾学校・聴覚特別支援学校の教育の充実発
展と幼児・児童・生徒を励ますことを願つて実施し
ております全国聾学校絵画展、全国聾学校作文コン
クール、全国聾学校合奏コンクールは、それぞれ立
派な成果と成績を上げることができました。また、
児童生徒の基礎的な言語力の基盤づくりをねらった
「読字力検定」試験への受験も、活発になってきて
います。

これ以外の事業としては、公益財団法人JKA競輪共益資金の補助事業であるFM補聴システムの無償貸与事業を実施しました。残念ながら補助事業からはずれた移動母子教室は協会の自主事業として実施いたしました。

このように昨年度も、協会の各事業の実施と運営に、皆様方の多大なご理解とご協力を賜りました。誠に有難うございました。今年度の各事業実施につきましても、皆様方の一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。ご挨拶といたします。

●全国聾学校合奏コンクール審査結果

金賞・文部科学大臣賞

・東京都立大塚ろう学校 小学部五年 十三名

「生命の奇跡」

楽器編成（キーボード、ドラ、ティンパニ、グロッケン、シンバル、スタンドシンバル、スネアドラム、バスドラム、ツリーチャイム）

銀賞

・東京都立大塚ろう学校 小学部六年 十七名

「ジュラシックパーク」

銅賞

・福島県立聴覚支援学校会津校 小学部 二名

「きらきら星変奏曲」

努力賞

・静岡県立静岡聴覚特別支援学校 中学部 十一名

「飛燕」

・香川県立聾学校 中学部 九名

「ボレロ」の主題による変奏曲

・筑波大学附属聴覚別支援学校 小学部五年 十二名

「すてきな日になれ」

審査員奨励賞

・東京都立中央ろう学校 高等部八名

「シンクロ BON・BA・YE」

・神奈川県立平塚ろう学校 中学部九名
ミュージカル「オペラ座の怪人」より

・京都府立聾学校 小学部十七名
「パッヘルベルのカノン」

・福島県立聴覚支援学校 中学部十一名
「キセキ (Green N)」

・福岡県立福岡聴覚特別支援学校 中学部五名
「希望の歌（交響曲第九番）」

・筑波大学附属聴覚別支援学校 小学部六年 十名
「おおかみなんかこわくない パート2」

全国聾学校合奏コンクール第二次審査総評

審査委員 草間 みどり

今回の全国合奏コンクール第二次審査は、十校十二グループの発表による審査となりました。

どのチームも一次審査から一段と演奏に磨きがかかっていました。一人一人の児童・生徒さんの力に応じ編曲し、音楽を美しく、楽しくまたは重厚に、軽快にと曲の特徴を表現する工夫をし、指導者の熱意溢れた指導のもと練習をつみかさねてきた様子が十分表現されていました。

入賞した学校の演奏は一人一人の音楽の熟成度と調和のとれた演奏、音の美しさが印象的でした。東京都立大塚ろう学校の演奏は、完成度の高い演奏で、フレーズの流れが丁寧に表示され、パーカッションがその流れを上手に支えている演奏でした。各奏者が丁寧な音を出し、旋律を歌わせ、間やテンポの変化にも息が合っていたのが印象的でした。各楽器間のバランスが良く、聴きごたえのある演奏でした。福島県立聴覚支援学校会津校は、木琴二台のシンブルな合奏ですが、音がとてもクリアできれいで、二人のかけ合いが見事でした。

どの学校もあと少しで入賞できる演奏力をもっています。各学校で積み上げてきた伝統や演奏の工夫、児童・生徒の個性や楽器の多様性を生かした編曲など、それぞれの学校の特徴を生かした次年度の演奏を期待しています。

全国聾学校合奏コンクール表彰式

第二十九回全国聾学校合奏コンクール表彰式は、平成三十年二月二十六日東京都立大塚ろう学校で行われました。山東昭子会長、田中一嘉審査委員長の出席のもとに表彰が終わると、金賞受賞曲「生命の奇跡」と銀賞受賞曲「ジュラシックパーク」を、それぞれの学年が演奏してくれました。この日も迫力のある素晴らしい演奏でした。来年度も頑張ってください。



全国聾学校合奏コンクール
表彰式
平成 30 年 2 月 26 日 (月)
東京都立大塚ろう学校

ハマナス募金

当協会では実施しております事業は、公益財団法人JKA競輪共益資金の補助をはじめとして、皆様方からのご寄附（ハマナス募金）により実施しています。皆様方のご理解とご支援に深く感謝いたしております。

今年度も計画事業の適正な実施に努めているところでございますが、昨今の社会情勢から事業資金の確保が大変厳しい状況にあります。つきましては、皆様方より一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

ハマナス募金のお振込みは、郵便振替もしくは銀行振込にてお願いいたします。

郵便振替口座 00110・9・134877

名義 聴覚障害者教育福祉協会

銀行振込 みずほ銀行江戸川橋支店

普通口座 1615748

名義 公益財団法人聴覚障害者教育福祉協会

会長 山東昭子

当協会は、平成二十九年三月三十日内閣府（内閣総理大臣）より税額控除に係る証明を受理しております。

平成二十九年十月一日から平成三十年三月末日までの間に、次の皆様方よりご寄附をお寄せいただきました。誠に有難うございました。

（敬称略）

関東地区聴覚障害者親の会連合会 鈴木厚、株式会社 P・Japan、伏見殿下杯チャリティゴルフ実行委員会事務局、川村美津子、春名英徳、伊与久美子、堀信子、（株）大場組 大場利秋、神邊洋吾、北村正彦、佐藤和子、小川勝江、成田久江、岡部忠信、安達スミ子、武田千枝子、浦川絢子、一般社団法人日本補聴器販売店協会、藤木裕子、大筋久夫、平井清美、小勝健児、斎藤捷彦、牧島ミリ、青森県ことばと心を育む会 中村久美子、井口昭、兵藤紀之、六車郁子、鶴澤支津子、齋藤佐和、全国聴覚障害者親の会連合会 安田喜一、辻村哲夫、千葉いのはな会 石川庄六、リオン株式会社、中村喜久子、野口敦子、チャリティ・アソシエーション、青野雅子、日高清子、井上富美子、小林明、石油連盟、東京ホールディングス（浅井健二）、西郷ソーラー発電株式会社（浅井健二）、（株）富士インベストメント（浅井健二）、（株）テアトルアカデミー（浅井健二）、株式会社 P・Japan、小澤配邦、仲田邦男、武田統子、筑波大学附属聴覚特別支援学校卒業生親の会 鴻友会

平成二十九年年度

公益財団法人 JKA 競輪公益資金による

補助事業実施報告

一、事業名

平成二十九年年度障害のある人が幸せに暮らせる社会を創る活動補助事業
二、事業実施内容

○ FM 補聴システム（リオン株式会社製）の購入・無償貸与
送信機・受信機三十セット

全国聾学校・聴覚特別支援学校、小学校、中学校、難聴幼児通園施設に在籍、在園する幼児・児童・生徒の家庭に貸与

※協会の一般事業として実施

○ 移動母子教室の開催

移動母子教室（十一月二十八日）
福岡県福岡市

テーマ

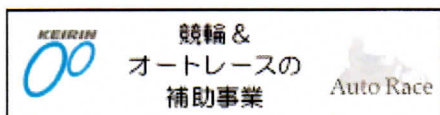
「聴覚障害教育の課題」

～就学前の聴覚障害児の教育～
講師 元大阪府立生野聾学校校長 坂井美恵子



移動母子教室

福岡市立心身障がい福祉センター



トピックス

平成二十九年年度

聴覚障害教育振興奨励賞受賞校について

平成二十九年年度の受賞校二校が聴覚障害教育振興奨励会（会長 渡邊研）から発表されました。

【概要】

本振興奨励会は聴覚障害児の教育の充実発展に貢献する実践研究を行った学校や個人を聴覚障害者教育福祉協会を通じて（株）日健総本社から助成を受け、表彰する事業です。

平成二十九年年度の応募校の研究テーマの傾向は高等部教育、幼児期教育相談、重複障害児の教育の分野にわたっていました。

【受賞校の紹介】

① 岐阜県立岐阜聾学校 代表 校長 林 正治
教諭 鈴木博司

○ 研究テーマ

木材工芸系列の教育活動に関する実践的考察
学力+αを高める取組の実践事例を通して

○ 研究のまとめ

職業としての専門性を深めると共に、物作りを通して働く力に+αとして、社会人として自立する力を養うための指導計画を作成し、休憩時間の活用、失敗の原因や創造性の探求、資格の取得の推奨など十二項目の重点的な実践を行っています。

② 山口県立山口南総合支援学校

代表 校長 田代雅昭
教諭 高田昌和

○ 研究テーマ

自閉症スペクトラム障害を併せ有する聴覚障害児童への指導・支援について
～国語科の指導・支援の工夫を中心に～

○ 研究のまとめ

女児A児の事例研究です。A児は高学年になるまでは朝ごはんを食べない、忘れ物が多い、宿題は行わない、離席が多い、学力の遅滞などがありました。実践は教科学習ではJSLを参考にしながら「精選」を、生活指導では「明確化」を基本に、授業は学習態勢の定着と知的好奇心の向上を目標としています。

聴覚障害乳幼児教育相談研究委員会の活動報告

聴覚障害乳幼児教育相談研究委員会

委員長 大沼直紀(元筑波技術大学学長)

生来あるいは乳幼児期に聴覚に障害を来した聴覚障害児には、母子コミュニケーション関係が成立し言語が獲得できるよう支援するための0・1・2歳からの早期教育が必要であるということについては、聴覚障害に関わる専門家や関係者の間ではその重要性がよく認識されています。それゆえにその教育に関わるのは必然のこととして、聾教育の世界では当たり前のように乳幼児教育相談教育を行ってきた歴史の経緯があります。乳幼児(0・2歳児)を聾学校が受け入れるのは教育制度ルールに反するのではないかなどの批判も受けながらも実践してきたのでした。しかし、なぜ聴覚障害領域では特異的に早期教育が必要なのか、その意義は何か、効果がどれほどあるものなのか、どこでだれが専門的な支援をしているのかなどについては、一般に説明し社会の理解を得る活動が十分だったとは言えません。

昭和四十年代より約半世紀にわたって聴覚特別支援学校が担ってきた聴覚障害乳幼児と保護者へのカウンセリング・ガイダンスについてはほとんど知られることがないまま現在に至っています。もはやその役割はボランティア的貢献の域を超えているのです。今こそ我が国における聴覚障害乳幼児の教育相談指導の実情を把握し、制度化に向けての課題と在り方を検討する必要があるとの想いで設立されたのが「聴覚障害乳幼児教育相談研究委員会」です。

聴覚障害乳幼児教育相談研究委員会は聴覚障害者教育福祉協会の事業の一つとして位置づけられ、実際の活動は文部科学省の「平成二十九年度特別支援教育に関する教職員等の資質向上事業」の委託を受

けた二十九年七月から開始されました。全国聾学校長会の協力を得て、100校の聴覚特別支援学校を対象に大々的な乳幼児教育相談指導の実態調査を実施しました。我が国には0・1・2歳の聴覚障害乳幼児の教育・療育を行う機関として、厚生労働省管轄の19の児童発達支援センター(旧難聴幼児通園施設)と文部科学省管轄の100の聴覚特別支援学校があり、合わせておよそ二千五百五十名の乳幼児が定期的な指導を受けているものと思われまします。そのうちの実に千八百十三名もの0・1・2歳とその保護者が聴覚特別支援学校の支援を受けているという実態が明らかにされました。全校的に多いとは言えない教員数の中で乳幼児教育相談担当の教員をどのように配置するか、また教員一人当たりの乳幼児個別指導や両親支援等の受け持ち人数、回数、時間が相当に多いこと、新生児聴覚スクリーニング後の子どもの養育や人工内耳に関する相談が増加し、それに応える専門性が必要となり、関係する専門職・機関との連携がいっそう求められることなども明らかにになりました。

実態調査の結果得られた膨大なデータの分析を通して、我が国における聴覚障害乳幼児の教育相談指導の現状が把握され、制度面、人材、経費、環境等の悩みは何か、何が問題なのか、課題解決の方策はあるのか、関係機関の役割は何か、聴覚特別支援学校の教育相談領域はどうあるべきかなどについて研究協議が重ねられました。

これらの研究成果は、文部科学省の平成二十九年度特別支援教育に関する教職員等の資質向上事業委託報告書「聴覚障害乳幼児の教育相談指導の現状と課題―特別支援学校(聴覚)における教育相談の実態調査からその在り方を展望する―」として平成三十三年三月に発行されました。今後、法制化等への展望のため残された課題は少なくありません。全国から寄せられた貴重な事例報告の共有化やデータベース化、保護者の質問に関わるQ&A集の作成などがあります。またシンポジウムを開催するなどして、我が国の聴覚障害乳幼児の教育・療育等に携わる関係者の共通理解と連携協力の必要性を確認し、社会全体にその意義を啓発していくことも考えているところです。

編集後記

この二月から三月にかけては、ピョンチャン・オリンピックやパラリンピックの結果や報道に、日本中が沸きかえり興奮しました。障害のあるなしにかかわらず、全力でメダルを目指すことに、人々が感動を覚えます。会報「響き」七十三号をお届けします。平成二十九年度後半の事業についての記事が中心となります。

第四十回を数えた「聴覚障害児を育てたお母さんをたたえる会」は、十二月十八日に開催いたしました。一月や二月の開催と違って寒さや雪の心配が少なかったため、主催者としては有り難かったです。

合奏コンクールの表彰式は平成三十年二月二十六日でしたが、今回も山東会長が受賞校である東京都立大塚ろう学校において直接文部科学大臣賞を授与することができました。また、前回に引き続いて審査委員長の田中一嘉先生も表彰式にご出席いただき、講評していただきました。有難うございました。

平成二十九年度の協会事業として行った「聴覚障害乳幼児教育相談研究委員会」の活動のまとめについて、委員長の大沼直紀先生の原稿をいただきました。二年目の活動にもご注目ください。

「聴覚障害児を育てたお母さんをたたえる会」をはじめとする協会の各事業等も、例年通り実施いたします。全国の聾学校、関係機関、関係団体等のご理解ご協力、ご支援を賜りますよう、事務局一同、心よりお願い申し上げます。

また、当協会の事業運営の支えでありますハマナス募金にも多大なご協力をいただけますようお願い申し上げます。